たない白丁である。

周防畑遺跡群の集落に住んでいたのは、このような郡雑任ではないだろうか。彼らは身分が低いか官人身分を持っていないために、帯金具を必要とせず、職によっては文字を扱うこともなく、職掌と関係して短頸壺や鉄鉢形土器のような特殊な器形の土器を必要としたのであろう。佐久郡衙に関係するとしても最末端の人々であり、集落の出土遺物に官衙的要素が薄いのである。

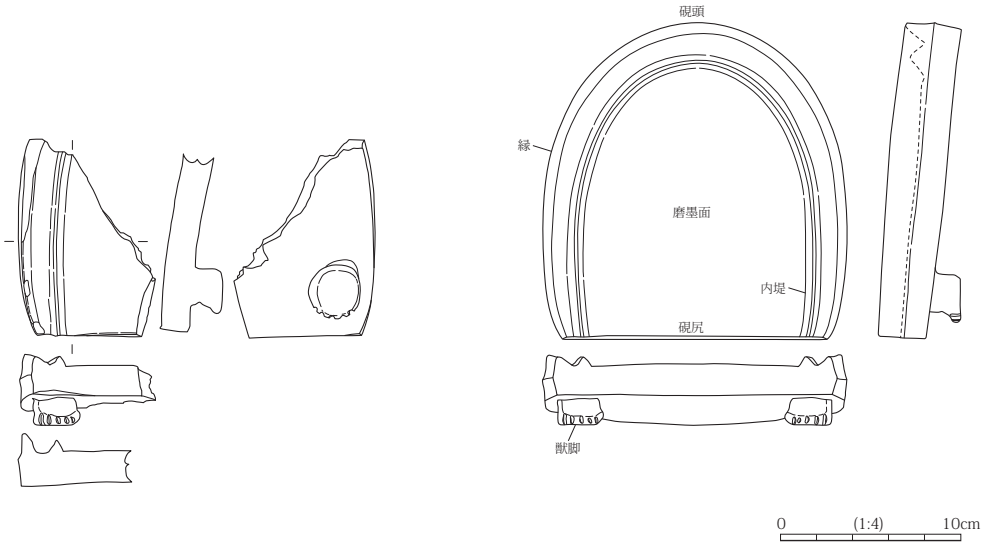
ところで、第３章で述べたように周辺の同時代の遺跡では官衙的な遺物が多数出土して、佐久郡衙の存在が予想されながら、未だに位置が確定できずにいる。平城京では、長屋王邸が左京三条二坊で４町の広さであったように、位階によって広さが決められているだけではなく、位階が高いほど平城宮に近い傾向がある。佐久郡衙を取り巻く佐久郡家でも同じようなことがあったと考えられるが、だとすれば未発見の佐久郡衙は、官衙的要素の薄い周防畑遺跡群の周辺にあり得ず、より官衙的要素の濃い西近津遺跡群（第３章第２節）の方が佐久郡衙に近いであろう。このように、調査された各遺跡の官衙的な要素の度合いを検討することによって、未発見の佐久郡衙の位置を絞り込めないかと考えているが、本論の趣旨とは外れてくるので後日を期したい。

４．須恵器獣脚風字硯について

須恵器獣脚風字硯は、３－⑤区Ⅱ層、圃場整備時の盛土中で出土した。これまでにほとんど類例のないものであるので、ここに取り上げる。

硯は、硯尻部の片側の破片で、残存長は 10.9cm、残存幅は 7.6cm、高さ 3.9cm である。硯尻部は真直ぐで、側面は緩い曲線を描き、楕円形の一方の端を直線で切ったような平面形と推定される（第 196 図）。その裏面の角に近い所に、硯尻部に向かって下部が緩やかに広がる長さ 3.0cm、幅 2.8cm、高さ 1.7cm の獣脚が付く。獣脚の前面には５箇所の刻みが入れられて指を表現している。磨墨面も特徴的で内提が縁から 15 ～ 18mm の所を平行に巡っている。縁の高さは最高で 11mm、内提の高さは最高で６mm と低い。縁の上下のほぼ中央に微隆起線が巡る。暗灰色を呈し、焼成は良好であるが硯面の全面と側面の一部に焼成時の灰が被り、側面と裏面の一部は黒色の自然釉が掛かる。磨墨面に灰が被っているので墨が滑り、実際に墨が磨れたかどうかは疑問である。

この破片から、以下のように全形を推定した。脚の底面は硯面と平行ではなくわずかに角度を持っている。風字硯は、通常２つの脚と硯頭部の３点で接地するので、硯頭部と脚の底面全体が同時に接地して



第 196 図　須恵器獣脚風字硯実測図と推定復元図

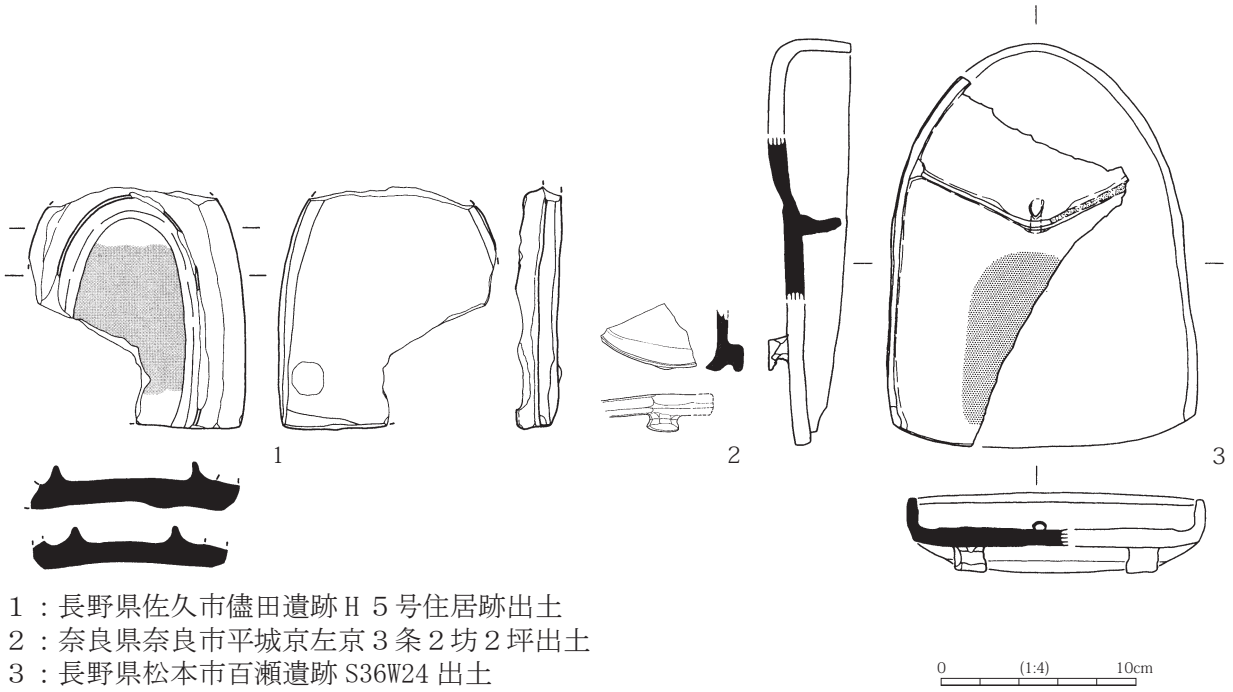
いるのが最も安定がよい。したがって、脚の底面と硯面の裏面を延長して交わる点を求めると、全長は17.5cm 前後となる。

幅は、本例と同様に内堤が硯尻部まであり全周すると思われる佐久市儘田遺跡Ｈ５号住居跡出土風字硯を参考にした（第 197 図）。儘田遺跡出土例は残存率が高く、残存長 12.8cm、残存幅 10.9cm であるが、全長は約 15cm、幅は約 13cm と推定される。裏面に脚の貼付痕があり、直径は 16mm、側面から脚の中心までの距離も 16mm である。本獣脚風字硯は脚の直径が接合部で 22mm、側面から中心までの距離が 19mm と儘田遺跡例よりも 20 ～ 40％大きい。したがって、幅を儘田遺跡出土例より 30％大きいとすると 17cm 前後である。長さを 17.5cm。硯尻部の幅を 17cm として、残存部の曲線から楕円形を描くと、自然な楕円形が描ける。したがって平面形は楕円形の一方を直線的に切り取ったような形になると推定した（第 196 図）。内堤については、風字硯は硯頭部に水をためるので、硯尻部だけにあっても用をなさない。したがって内堤は硯頭部からの延長であり、儘田遺跡出土例のように全周すると推定した。

この獣脚風字硯の年代であるが、遺構外出土のため、伴出遺物はない。したがって形態から時期を考えるしかない。獣脚風字硯と同様に獣脚を持つ獣脚円面硯は７世紀前半頃から８世紀初めに限られる。一方風字硯は８世紀後半に現れる（奈良文化財研究所 2003・2004）。この間には断絶があるが、獣脚円面硯は高級品であるので、伝世品や情報として獣脚円面硯が８世紀後半まで残っていた可能性はある。また、硯尻部では用をなさない内堤が全周しているのは円面硯や楕円硯の名残と考えられる。したがって、この獣脚風字硯は、風字硯登場の初期、８世紀後半のものと考えられる。

先述の内堤が全周する硯が出土した儘田遺跡Ｈ５号住居跡は伴出する土師器蓋が８世紀代ながら、風字硯の出土からそれが盛行する９世紀前半に位置付けている。しかしながら、この風字硯は内堤が全周することから風字硯でも初期のものと思われ、また硯は伝世することがあっても、日常の器である土師器蓋が伝世することは考えにくく、８世紀代に位置付けてよいのではないか。

この風字硯の産地であるが、胎土分析ではＣグループに属して、産地は不明である。しかしながら磨墨面に灰が被って実用に供さない品物が長距離運ばれてきたとは考えにくく、地元産と思われる。８世紀後



１：長野県佐久市儘田遺跡Ｈ５号住居跡出土
２：奈良県奈良市平城京左京３条２坊２坪出土
３：長野県松本市百瀬遺跡 S36W24 出土

第 197 図　他遺跡出土の風字硯

半という年代と合わせて、佐久郡司などの有力者が風字硯の登場直後に円面硯は知っていても風字硯をよく知らない工人に本格生産を目指して作らせた試作品ではないかと考えている。

奈良文化財研究所の平城京出土陶硯データベースでは風字硯（獣脚）と称するものは、左京３条２坊２坪の６ＡＦＩ　ＳＭ71 地区南北溝出土の風字硯（4450）１点のみである（第 197 図）。残存長 8.2cm、残存幅 13.8cm、残存高 5.8cm の硯頭部の破片で、裏に粗いつくりの獣脚が付く。磨墨面に内堤は見られない。硯頭部に脚が付いていることから、これが風字硯であるとすると硯尻部を上げるために硯尻部にさらに高い脚を付けなければならないが、硯頭部の脚は湾曲していて接地面が小さく、硯尻部に高い脚を付けて傾けると非常に不安定になって使いづらいと思われる。報告書に「楕円硯の可能性の高いものを含む」とあるように楕円硯である可能性が高いと思われる。

もう１点、獣脚風字硯とは報告されていないが、その可能性が高いものをあげておく。長野県松本市百瀬遺跡の検出面出土の風字硯は、図で見る限りは脚が直方体ではなく、下部がくの字に曲がって獣脚を表現しているようである（第 197 図）。脚部に指の表現がない点、硯尻部が曲線である点、内提が磨墨面の硯頭部と硯尻部を山形に分けている点などが本遺跡群のものと異なる。

このように、本遺跡群出土の須恵器獣脚風字硯は、全国的にもほとんど例を見ない資料であると同時に、本地域における風字硯の受容の過程に関して重要な資料である。

引用・参考文献

井上巌　1998「胎土分析から見た須恵器生産体制に関する考察―陶邑・湖西・御殿山窯跡群に共通する現象―」『考古学と自然科学』第 37 号

井上巌　1999「胎土分析」『更埴条里遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原遺跡）―古代Ⅰ編―』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 42

鐘江宏之　1997「八・九世紀の国府構成員―文書行政への関わり方を中心に―」『弘前大学国史研究』第 102 号

川村好光　2000「ヒスイ勾玉の誕生」『考古学研究』第 47 巻第３号

木島　勉　2006「翡翠勾玉の生産」『季刊考古学』第 94 号

駒見和夫・櫻井秀雄　2004「甲信　長野県・山梨県」『日本玉作大観』

小諸市　1986『小諸市誌』自然編

小諸市教育員会　1983『曽根城遺跡』小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第７集

小諸市教育員会　1988『鋳物師屋』小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第 11 集

小諸市教育員会　1994『東下原　大下原　竹花　舟窪　大塚原』小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第 17 集

小山岳夫　1994「素描　弥生社会解体に伴う集落の拡散」長野県考古学会誌 74

佐久考古学会　1990『赤い土器を追う』佐久考古６号

佐久市　1988『佐久市志』自然編

佐久市　1995『佐久市志』歴史編（一）原始古代

佐久市教育委員会　1980『周防畑遺跡』

佐久市教育委員会　1985『鋳師屋遺跡』

佐久市教育委員会　1988『鋳師屋遺跡Ⅱ』

佐久市教育委員会　1989『前田遺跡（第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ次）』

佐久市教育委員会　1995『西一本柳遺跡Ⅱ・中西ノ久保遺跡Ⅰ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 37 集

佐久市教育委員会　1995『曽根新城遺跡　上久保田向遺跡　西曽根遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 41 集

佐久市教育委員会　1996『権現平遺跡　池端遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 43 集
佐久市教育委員会　1994『池端城跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 48 集
佐久市教育委員会　1994『藤塚遺跡Ⅲ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 50 集
佐久市教育委員会　1997『円正坊遺跡Ⅱ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 53 集
佐久市教育委員会　1999『五里田遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 74 集
佐久市教育委員会　1999『八風山遺跡群』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 75 集
佐久市教育委員会　2001『榛名平遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 84 集
佐久市教育委員会　2001『西一本柳遺跡Ⅴ・Ⅵ　中長塚遺跡Ⅰ・Ⅱ　松の木遺跡１・Ⅱ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 91 集
佐久市教育委員会　2001『辻の前遺跡Ⅱ　中仲田遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 92 集
佐久市教育委員会　2002『円正坊遺跡Ⅳ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 102 集
佐久市教育委員会　2002『聖原　第１分冊』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 103 集
佐久市教育委員会　2003『聖原　第２分冊』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 107 集
佐久市教育委員会　2003『佐久駅周辺土地区画整理事業埋蔵文化財発掘調査報告書』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 110 集
佐久市教育委員会　2004『西一本柳遺跡Ⅸ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 113 集
佐久市教育委員会　2004『聖原　第３分冊』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 115 集
佐久市教育委員会　2004『聖原　第４分冊』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 122 集
佐久市教育委員会　2005『聖原　第５分冊』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 126 集
佐久市教育委員会　2008『市道遺跡Ⅲ　辻遺跡　儘田遺跡Ⅱ　西裏遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 148 集
佐久市教育委員会　2008『周防畑遺跡群大豆田遺跡Ⅰ　Ⅱ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 156 集
佐久市教育委員会　2008『寄塚遺跡群寄塚遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 157 集
佐久市教育委員会　2009『森平遺跡　北近津遺跡Ⅱ　西一里塚遺跡Ⅲ　大豆田遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 165 集
佐久市教育委員会　2009『西近津遺跡群　西近津遺跡Ⅶ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 162 集
佐久市教育委員会　2009『下宮原遺跡Ⅰ・Ⅱ　周防畑遺跡群』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 163 集
佐久市教育委員会　2010『西一本柳遺跡ⅩⅥ　北一本柳遺跡Ⅲ　東大門先遺跡Ⅱ　西八日町遺跡Ⅲ　西八日町遺跡Ⅶ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 175 集
佐久市教育委員会　2010『周防畑遺跡群　南近津遺跡Ⅱ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 177 集
佐久埋蔵文化財調査センター　1987『北西の久保』佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第８集
佐久埋蔵文化財調査センター　1989『腰巻　西大久保　曲尾Ⅱ』佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第 15 集
高橋浩二　2010「翡翠半玦形勾玉の製作技術と地域性の背景」『待兼山考古学論集Ⅱ―大阪大学考古学研究室 20 周年記念論集―』
堤　隆・藤森英二・小山岳夫・冨沢一明・櫻井秀雄・森泉かよ子　2008『考古学が語る　佐久の古代史』
堤　隆　2012『浅間　火山と共に生きる』
戸根比呂子　2013「弥生時代玉文化研究の展望」『玉文化』第 10 号
長野県教育委員会　1997『大規模開発事業内遺跡－遺跡詳細分布調査報告書－』
長野県教育委員会　2000『大規模開発事業内遺跡－遺跡詳細分布調査２－』
長野県教育委員会　2003『大規模開発事業内遺跡－遺跡詳細分布調査３－』
長野県教育委員会　2009『大規模開発事業内遺跡－遺跡詳細分布調査４－』
長野県考古学会　1999『長野県の弥生土器編年』
長野県埋蔵文化財センター　1992『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書１　下茂内遺跡』
長野県埋蔵文化財センター　1992『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書２　木戸平Ａ・吹付・東

林・鶉ヲネ・上中原・千草場・城の口・西林・東祢ぶた・西祢ぶた・大星尻古墳群・丸山古墳群・丸山Ⅱ・丸山・北山寺・東大久保・西大久保・腰巻・栗毛坂・西赤座・中久保田・枇杷坂』
長野県埋蔵文化財センター　1998『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書５　松原遺跡　弥生総論６』
長野県埋蔵文化財センター　1998『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書１　県　県南西部　池尻　小田井城南部台地　　唄坂　金井城跡　中金井　栗毛坂　下蟹沢　長土呂　常田居屋敷　前田　砂原　中平・田中島　土合』
長野県埋蔵文化財センター　1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 17　栗毛坂・長土呂・野火附・前田・宮ノ反Ａ・下前田原・長野原・赤沼』
長野県埋蔵文化財センター　1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 18　芝宮遺跡群　中原遺跡群』
長野県埋蔵文化財センター　2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 19　三田原遺跡群　郷土遺跡ほか』
長野県埋蔵文化財センター　2001『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 29　香坂山遺跡』
長野県埋蔵文化財センター　2007 ～ 2010『長野県埋蔵文化財センター年報　23 ～ 26』
長野県埋蔵文化財センター　2009『上信越自動車道佐久ジャンクション建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　中原遺跡・野火附遺跡・野火附城跡』
長野県埋蔵文化財センター　2009『中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書４　濁り遺跡・久保田遺跡・西一里塚遺跡群』
長野県埋蔵文化財センター　2013『中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書１　鎌田原遺跡・近津遺跡群・和田原遺跡群』
中村順昭　1995「郡家の所在と郷の編成―『和名類聚抄』にみえる郡家郷をめぐって―」『史叢』第 54・55 合併号
奈良国立文化財研究所　1996『平城京長屋王邸跡　左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』
奈良文化財研究所　2003『古代の陶硯をめぐる諸問題』
奈良文化財研究所　2004『古代の官衙遺跡　Ⅱ遺物・遺跡編』
林　幸彦　1982「周防畑Ｂ遺跡」『長野県史　考古資料編　主要遺跡（北・東信）』
原　明芳　2011「信濃の陶硯」『長野県立歴史館研究紀要』第 17 号
平川　南　1996「“古代人の死”と墨書土器」『国立歴史民族博物館研究報告』第 68 集
平川　南　1991「墨書土器とその字形―古代村落における文字の実相―」『国立歴史民族博物館研究報告』第 35 集
福田和憲　1970「駅戸に関する二、三の考察」『信濃』第 22 巻第５号
御代田町　1995『御代田町誌』自然編
御代田町　1998『御代田町誌』歴史編上
御代田町教育委員会　1983『川原田遺跡』御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書
御代田町教育委員会　1985『野火付遺跡』御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書
御代田町教育委員会　1987『前田遺跡』御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書第５集
御代田町教育委員会　1988『十二遺跡』御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書第６集
御代田町教育委員会　1989『根岸遺跡』御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書第７集
御代田町教育委員会　1993『細田遺跡』御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書第 14 集
森貞次郎　1980「弥生勾玉考」『鏡山猛先生古稀記念　戸文化論攷』
柳沢　亮　2008「『郡』刻書土器と銅印の発見―西近津遺跡群の調査から―」『千曲』第 137 号
山形県埋蔵文化財センター　2002『中袋遺跡　発掘調査報告書』
山中敏史　1994『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房